

ケーブル技術ショー 2015開催

主要展示ブースレポート 「10Gbps新提案が勢揃い！」



ケーブル技術ショー 2015の会場風景

「ケーブルコンベンション2015」とその関連イベント「ケーブル技術ショー 2015」（主催：日本ケーブルテレビ連盟、日本CATV技術協会、衛星放送協会）が6月10日～11日、東京国際フォーラムで開催された。両イベントの来場者は延べ1万275人と1万人を超えた。今回のケーブル技術ショーは、FTTHとDOCSIS3.1による10Gbps超サービスを実現するシステムや、今年12月に開始予定のオールケーブル4Kチャンネルなどに向けた4K対応の展示が目立った。この記事では、ケーブル技術ショーの大型ブースで注目した展示をレポートする。

●取材・文：渡辺 元：本誌編集部

世界初、40Gbpsの NG-PON2動態展示

■ 伊藤忠ケーブルシステム (ICS)

40GbpsのNG-PON2の動態展示がケーブルテレビ事業者の注目を集めた。システムはアルカテル・ルーセント社製NG-PON2プラットフォーム「Alcatel-Lucent 7360 ISAM FX-4」（写真2）。イベントで40GbpsのNG-PON2の動態展示が公開されたのは世界初だという。デモ展示では、合計10波をNG-PON2で1芯の光ケーブルに多重して、OLTとONUの間で送受信して見せた。10波とは、10G-PONの下り10Gbps×4波・上り10Gbps×4波、GPONの下り2.5Gbps・上り1.25Gbpsだ。下り40Gbps（10Gbps×4波）・上り40Gbps（10Gbps×4波）を波長多重できるの

がNG-PON2の特長だ。アルカテル・ルーセント社製NG-PON2のOLTとONUは、輻輳やOLTのPONポート、ラインカードに障害が発生した場合は、ONUを自動的に別の波長に移動してサービスの停止を回避できる。

このように信頼性が高いという特長を活かして、今回の展示ではB2Bビジネスモデルをケーブルテレビ事業者による企業への回線貸しだ。ボーダフォンや北米携帯電話事業者はアルカテル・ルーセント社製NG-PON2システムを使った携帯電話基地局回線の導入を検討中しており、日本でもケーブルテレビ事業者による携帯電話会社への回線貸しビジネスは有望だろう。

ARRIS社製のCCAPプラットフォーム「E6000 CER」（写真3）や、同社製のハードウェアベースの次世代統合型コンプレッションプラットフォーム「ME-7000」なども展示した。ME-7000は

MPEG-2/MPEG-4のエンコード、トランスコードを行う。1台で最大24HDチャンネルに対応できる。2016年にはHEVC/4Kに対応させる。

■ 関電工

改良型の「システム型ベデスタルボックス」（写真4）を展示した。ベデスタルボックスはケーブルを地中化した時、ノードやアンプなどの機器を収容して歩道など屋外に設置する箱。今回の改良型はサイネージ用モニター、AED、LED防犯灯、防犯カメラ、Wi-Fiアクセスポイントなどを搭載し、地域の情報配信や安心安全に貢献できるようにした。サイネージ用モニターは13インチのハイビジョンモニターで、災害時には災害情報を表示するが、普段はケーブルテレビ事業者のCMや地域情報、天気予報などを映像で流せる。今回展示したのは試作品で、今後ケーブルテレビ事業者などの意見を聞いた上で